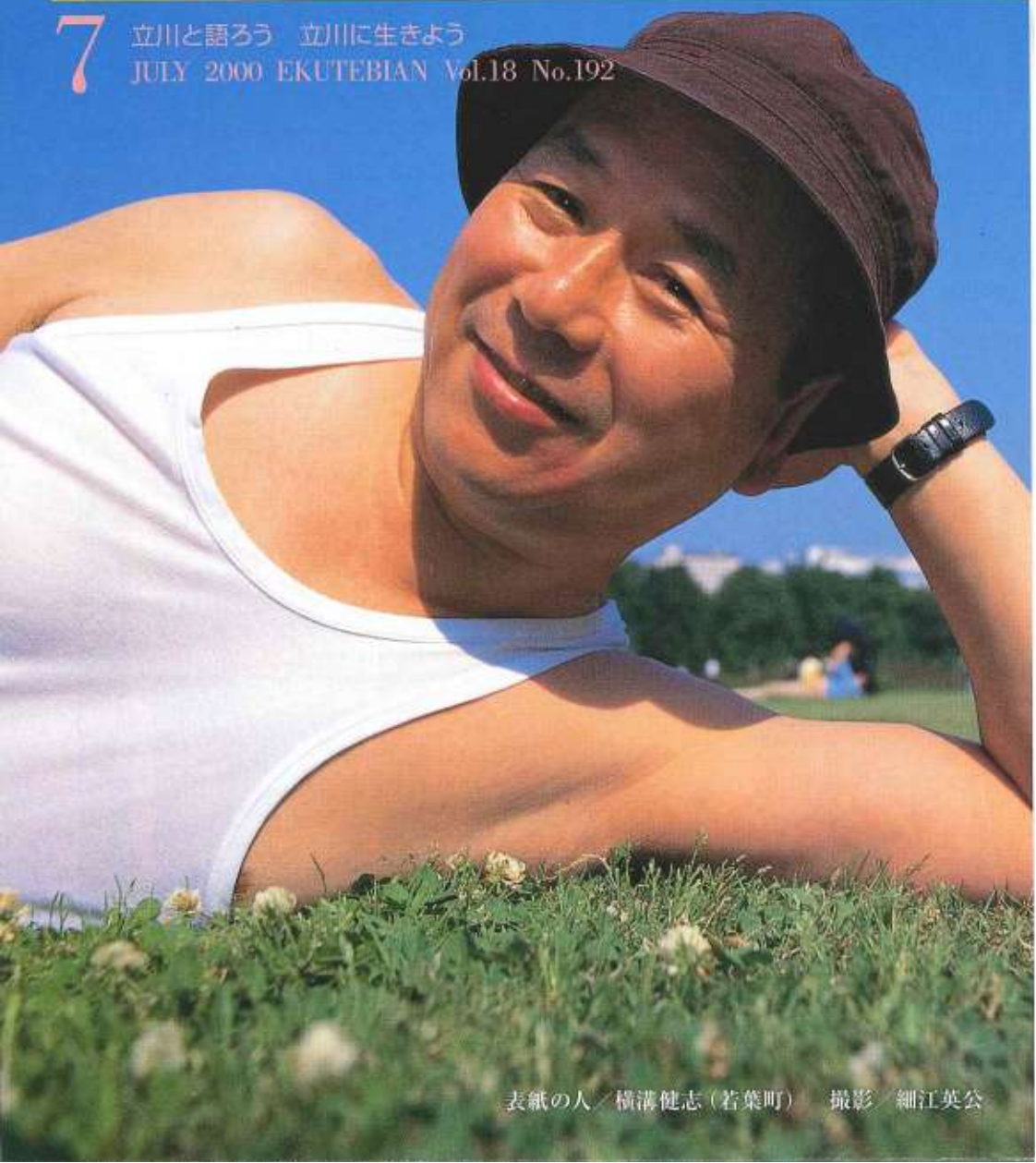


えくてびあん

7

立川と語ろう 立川に生きよう

JULY 2000 EKUTEBIAN Vol.18 No.192



表紙の人 / 横溝健志(若葉町) 撮影 / 細江英公

【白欐】

【シラカシ】

学名：Quercus myrsinaefolia Blume
ブナ科の常緑高木。関東地方を中心に生垣や防風林として利用される。材はカシ類で最も良質。

立川周辺を含む武蔵野台地は、昔から畑作が中心で表土は軽く、冬の北風や春の嵐による、名物の「赤っ風」に悩まされてきた。また、夏の日ざしや冬の寒さは共に厳しく、このような環境を少しでも和らげるため、屋敷には必ずと言ってよいほどケヤキやシラカシを植えた。常緑樹のシラカシと落葉樹のケヤキは合理的に緑を供給してくれる。

昔の農家の多くが葺葺屋根で、野火やもらい火による火事を防ぐため、周りに植えられたシラカシは必ず家の高さ迄にした。カシグネは母屋の前、一間ぐらい離れた所に植え、四角に刈り込んだ。夏の日除け、冬の心地よいぬくもりが家の中にさし込む仕組みだ。

さて、富士見町の農業試験場本館前には、立川一を誇るシラカシの大木がある。直径は目通りで約九十センチ、高さは約二十メートルに達する。かつてこの地には数件の農家があった。大正十三年、試験場の開設により家々は引越されたが、多分その頃から、切るに切れない立派な木だったに違いない。

シラカシはすばらしい樹木である。私たちの生活に密着した用途の広い「材」であり、「どんぐりゴマ」や童謡に歌われるなど、子供たちの夢を誘う木でもある。



一樹もて一山成せり 欐の花

山崎冬華

所在地：東京都農業試験場
本館前
(富士見町3丁目)

地域出版だから出会える 宝物があるんです

けやき出版・代表取締役
清水 定さん



■清水 定(しみずさだむ) / 立川市を中心とした経済人、文化人の呼びかけで1981年に設立された株式会社けやき出版に設立当初から役員として参加。社長になってすでに12年になる。これまでに世に送り出した本は企画出版・自費出版合わせて総計約1000点。三多摩地域を代表する出版社として書籍のほかに、季刊雑誌「多摩ら・び」の編集・発売元も手がけるなど地域に根ざしながら活動の場を広げ、出版人として確かな存在となっている。
■芳賀敬博(はがとしひろ) / えくてびあん編集人

芳賀 けやき出版は昭和五十六(一九八二)年の設立ですから、来年はちょうど創立二十周年ですね。今日は同じ立川で出版文化に携わる者同士ということでお話をしたいんですが、これまでお出しになった本は何点くらいになるんですか？
清水 企画出版で二百五十点を越えました。自費出版は十九年間で七百から八百点はお受けしていると思いますね。
芳賀 合わせてざっと千点。年に五十点以上のペースですから地域出版としては大変なエネルギーですね。会社設立の経緯もいわれる普通の出版社とはちよっと違っているようですね。
清水 立川の経済人や文化人、教育関係の方々には、ずっと以前から三多摩が文化不毛の地などといわれるのは情けない、出版社がほしいという願いがあつたようです。なかなか実現しなかったのですが、昭和五十年頃からそういう機運が高まり、私は立川高校夜間部時代の恩師だった五

十嵐栄治さんから声をかけていただいた役員の一員に加わりました。地域出版というのには、長野などで活発に活動されているいわゆる地方出版ともちよっと違うんですね。三多摩は「東京のベッドタウン」という呼び方をずっとされていまして、寝るために帰るだけの「ベッドの街」なんて、こんな寂しい話はないでしょ。地域にだって歴史も文化もあるし伝統もある、人々の暮らしもある。そういうものを掘り起こしながら、一方で情報を発信していくんだという目的を持って、立川の方々が作った会社なんです。
芳賀 その意識は一緒ですね。「えくてびあん」はとにかく立川という区切りにこだわり、しかも「人」というテーマを掘り下げることでやってきていますが、東京というところとどこか繋がらないほど大きなものでくられたくない、単なる中央の延長じゃないんだという反抗心みたいなものがないと続けられないですよ。
清水 そうですね。うちの場合、多摩地域という少し広い地域を見ているんですが、地域出版というのはひとつの本が何万部も売れることはほとんどないんです。二千部、三千部の世界ですよ。そんななかで地域出版を続けていくには、地域に対する愛着はもちろんのこと、何でも中央から発信されるものに従うとか中央の真似をするんじゃない。そういう反中央、反権力の視点がなくて、がんばれないですよ。

芳賀 数多く本を出してこられて、特に印象深い本というのはあるものですか。
清水 どうしても売れたものか思い出し残るんですが(笑)。会社を作ったときに「立川空襲の記録」という大作を出して、意義深い本ではありましたが大変な借金を抱えたんです。役員会では会社の

清水 地域出版を存続させていくための方向性を求められていると思います。うちもずっと地域にこだわってやってきたわけですが、頑強に地域出版に限定するんじゃないって全国版で売れるものも出しているって、ここ数年、年一程度試みてきて手応えも出てきました。来年は二十周年の節目なので本格的にそういうものを何点か出そうということ、実績のある著者との折衝を精力的に進めているところですよ。例えば、世界中を放浪する作家で若者に人気のあるロバート・ハリソンさんに企画書を送ったらOKの返事が来て、いま準備を進めています。社内では、小さな出版社でもいい企画をぶつければ著者も応えてくれる、自信を持って進もうと言っているんです。
芳賀 立川からいよいよ全国に飛び立っていきませんか？
清水 そんな思い上がった気持ちではないんです。あくまでも地域を重点に、少し営業戦略に柔軟さを加えようということ、基本スタンスは変わりません。ありがたいことに、地域の本を出しているから多摩の書店さんもいい場所にいる

本を置いて下さる。そういう協力や応援をいただいてもなお、地域出版そのものの存在が難しくなってきたり、今まで百売れていたような本が七十か八十しか出ないですし、自費出版や企業出版社のような仕事も右肩上がり伸びていく状況ではないですからね。
芳賀 そういえば、自費出版の点数が多いのも特徴的ですね。立川や多摩には発信すべきものを持った方が多いんだなとも思います。
清水 自費出版は、頼まれたからいい本を作って差し上げれば良いという単純なものじゃないんですね。自費出版に持ち込まれる原稿のなかには、これは書店で売ったら面白いという宝物がいくつもあるんですよ。守屋龍男さん著の「多摩の低山」は地域のベストセラーになった本ですが、こんなに優れた著者がいることを最初は知らなかった。そういう宝物に出会える、素晴らしいものを持っているらっしゃる人材を見い出せるのは地域出版をやっているからこそで、大手の出版社ではできないと思いますね。
芳賀 著者を発掘するのは、まさに出版



人冥利というものですものね。
清水 その通りです。そのために、うちは編集方針として自費出版でも持ち込まれた原稿に率直に意見を申し上げて、プロとしてのアドバイスをします。出版社としての姿勢を自費出版に対しても保とうと。それが多少は評価につながって、仕事が切れずに来るのかなと思いますね。
芳賀 われわれも常に感じていますが、それが地域のなかで活動していく厳しさでもあり、同時に地域に育てていただくありがたさでもあるんですね。
清水 ありがたいですよ。ひとつのことを成し遂げるにもひとりの力ではできない。多くの方の協力があつてできるんですからね。その意味でも将来的に立川を拠点にしているメディアが力を合わせて何かできたらいと思いませんか？立川のあるべき都市像についての市民シンポジウムを開くとか。住んでいるひとりひとりの市民の方の思いを拾い上げていくことって大事だと思うんですよ。その思いを集めていくと、また違ったものが生まれてくるはずですよ。
芳賀 いいですねえ。お話ししているうちにいろいろ膨らんでくるなあ。

存続を危うくしかねないから企画出版はしばらく見合わせようということになりました。その時に、なんとか請け負った出版だけではなく書店で売って本でも展覧会を開けないかと「アサヒタウンズ」で連載していた「多摩味の店」という企画に目をつけたんです。売れるだろうという自信はありましたが、制作費を出すわけですから確実な見通しがほしい。考えまして、朝日新聞の専売店で新聞拡張の洗剤なんかの代わりに配ってほしいかと、朝日新聞東京本社の販売局に乗り込みました。その時は階段を上る足が震えましたよ。そうしたら、販売局長が会って下さって「それは面白いね」と四万五千部買い取ってくれることになったんです。嬉しかったですねえ。それが「多摩の味100店」です。大車輪で作って朝日に納め、書店に出したら、もう連日電話が鳴りっぱなし。半年の間に十萬部くらい売れました。版を重ねて最終的には約二十万部になりましたが、この本で企画出版の芽が出ました。出版界に入っただけの思い出深い本です。この年は黒字になりましたし(笑)。

芳賀 苦しい時期を乗り越えるには、やはり人との出会いがあるんですね。でも、ここまでくると余裕をもってできるんじゃないですか。
清水 そんなこと全然ないですよ。出版界全体が不況といわれますが、地域出版は市場が狭いだけにとどまらず、先ほど申し上げたようにひとつの本は大体三千部が限界です。値段設定も売れるためには低く抑えないといけないんです。在庫も年々蓄積しますしね。全国的にみて地域出版は行き詰まっています。
芳賀 曲がり角に来ていると？

幸町	ティールームプチ・フルール	幸町4-16-1 535-6734
	ロッテリア 立川砂川九番店	幸町4-38 537-4413
	とんかつ・割烹 かつ亭	幸町4-59-3 535-4611
町	和洋菓子たちばな	幸町5-2-16 537-0347
	BSタイヤショップ 佐藤商会	幸町5-10-2 537-0912
	new gyozza 1059 餃子天国	錦町1-5-6 526-2283
	ステーキレストラン リブレ	錦町1-8-3 527-1630
	和菓子処 ゆうき	錦町1-8-5 525-0760
錦町	美容室 アリス	錦町1-15-21 525-1100
	パンと洋菓子 うちのやブルマン	錦町1-18-7 524-9280
	服薬子・ファンシー むぎばたけ	錦町2-1-1 526-0210
	美容室 FALCO	錦町2-1-10 528-2389
	鎌倉公庁御用達・日用雑貨 池田屋	錦町2-1-10 522-3731
	酒の寿屋	錦町2-1-13 522-3625
	しゃぶしゃぶ・料理 しゃぶ・りん	錦町2-1-33 527-2228
町	スペイン料理 TAPAS	錦町2-2-29 529-0733
	振興信用組合 立川支店	錦町2-2-32 524-1471
	三田花店本店	錦町2-5-23 524-4187
	セガミ薬局	錦町2-7-8 525-9212
	アミューたちかわ	錦町3-3-20 526-1311

えくてびあんの輪
人があつて、街があつて。
あなたがあつて、立川があつて。
そこにちよつとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

今月は 幸町・錦町・羽衣町・柴崎町のお店です。		
幸町	そば処 高尾亭	錦町5-5-31 522-2710
	レストラン ラ・ボボラリータ	錦町6-9-25 527-3880
錦町	林 歯科	羽衣町2-7-10 522-5657
	中島豆腐店	羽衣町2-12-34 522-5732
羽衣町	珈琲屋 らうむ	羽衣町2-27-9 526-3643
	和風レストラン 蔦屋	羽衣町2-27-14 526-3698
	フレッシュフルーツ 立川商店	羽衣町2-30-6 522-3565
町	本・事務用品 泰明堂	羽衣町2-31-1 522-3353
	文具のないうとう	羽衣町2-33-1 522-3677
	赤松タバコ店	羽衣町2-42 524-7852
柴崎町	カフェ べる・こむーね	柴崎町2-2-7 529-7800
	味乃寿司 由	柴崎町2-2-8 522-3733
	関田 酒店	柴崎町2-2-18 524-2960
柴崎町	ビストロすぎ浦	柴崎町2-2-23 525-9929
	ステーキ&欧米料理 クワトロ	柴崎町2-3-3 528-2983
町	casual restaurant ラ・パンパ	柴崎町2-3-3 524-5800
	キャノンO1ショップ	柴崎町2-3-6 528-1501
	コミュニティストア はなむら	柴崎町2-3-9 522-2491
	不動産 ユウ都市企画	柴崎町2-3-13 528-2566
	不動産 コマツホーム	柴崎町2-4-6 525-5811

第1回えくてびあん杯争奪「立川ベーごま選手権」優勝決定戦

初代ベーごま王は 長島さんに決定!!

“君は少年のころを今も持ちつづけているだろうか—”

いにしえのガキ大将たちの盛典、「立川ベーごま選手権」。

1年間に亘って繰り広げられた熱い闘いに

この日、ついに終止符がうたれた。参戦者16名。その頂点に立ち、見事初代チャンピオンに輝いたのは、錦町の中華料理店「五十番」にお勤めの長島勇二さんだ。

長島さん、おめでとう!

●巴戦第一試合

[長島勇二選手 VS 木村貴浩選手]

スピードの長島か、テクニックの木村か。中盤からジリジリとポイントを増ぐ長島選手に対し、得意のファインプレーで挽回を狙う木村選手。実力伯仲の好勝負は制限時間を使い切り、確実にポイントを奪取した長島選手の勝利。



左から大根田和美さん、長島勇二さん、木村貴浩さん。

●巴戦第二試合

[長島勇二選手 VS 大根田和美選手]

長島選手、初戦の疲れも見せず好調な滑り出し。対する大根田選手、自前のヒモで試合に臨むも、いつもの安定感がみられず。終盤、ようやくペースをつかんだが時遅し。開始後12分、大根田選手の手持ちゴマがなくなり、長島選手の優勝が決定。



大根田和美選手

(栄町・立川市青少年健全育成連絡会会長)

その体態に相応しい安定感あるコマさばき。結び強い闘いぶりです。優勝決定戦に歩を進めた。

木村貴浩選手

(曙町・「木村福蔵商店」店主)

本選手権唯一の技巧派。意外な動きを見せるコマの導線は多くのファインプレーを生み、歴戦をモノにした。



優勝は「巴戦」で決した!

ベスト4進出者のうち、岩崎泉さんが急用のため不参加。そのため、勝敗は3名による「巴戦」で決することに。優勝するためには2連勝しなければならないが、長島さんは独自のペースを崩さず、圧倒的なコマさばきでストレート勝ち。その強さには、木村・大根田両氏も舌を巻いた。



長島勇二選手

(錦町・中華料理店「五十番」シェフ)

前傾姿勢、その独特のフォームから繰り出されるコマの観さは圧倒的。文句なしのチャンピオンだ。



大会実行委員長・立井啓介(本誌発行人)より、長島さんに優勝杯の授与。



右中: 乾杯の音頭は杉田富雄さん(曙町)。

1回戦で木村選手と対戦、今回は応援団長だ。

右下: 名人たちの妙技、手に汗握る試合の行方に観戦者もやんやの喝采。



(若葉町)

1965年から「満活版」(みぞかっぱん)を始め、消えゆく活版印刷の保存に情熱を注ぎ「8ボ通信」の発行をして10年以上になる。また、写真の世界でもアマチュアの世界を超えて独特の視点から撮影、1999年の個展「朝の記憶」では全国にまたがり、いまだに残る牛乳瓶の受け箱を撮影し、同じく個展「自らも意図しないのに」は3回を数える。活版印刷、写真ともに独特の境地を開き他の追随をゆるさないことからファンも多い。武蔵野美術大学デザイン情報学科教授。(於:昭和記念公園/撮影:細江英公)

木もれ日

6月に入ると立川市内でも郭公の啼き声を聞き、夏だなあという思いを強くいたします。7月、梅雨がなければそろそろ蝉しぐれ。夏も本番です▼蝉採りに夢中になった思い出をお持ちの方も多いでしょうが、本号で優勝決定選のもようをレポートしているページも、ある年代以上には忘れがたい少年時代の記憶です▼しよせん遊びの企画であるにもかかわらず、参加して下さった16名の選手の方たちが1回戦から熱闘を繰り広げ、皆さんの熱気に主催者側が驚いたほどでした▼優勝された長島勇二さんは、ページに触れたのは約40年ぶりのこと。ところがコマを持ったとたん、昔の感覚が戻ったそうです。若い頃に体で覚えたものは生涯忘れないのでしょ▼長島さんに限らず、失礼ながらとくに少年を卒業されたはずの立川の皆さんが「明日は体が痛いだろうな」などとほやきながら一投ごとの勝敗に熱中する姿は、微笑ましくも尊いものに思われました。分野こそ違え、社会において確かな存在となる方には、体のどこかに少年期の経験が、熱い核のように息づいているに違いありません▼ナイフで鉛筆も削れない今の子どもたちが、そういう経験を持てるのだろうか、などと余計な心配までしてしまいました。

【第三次えくてびあん同人】
編集 大久保清志/小林康史/杉山清樹/
芳賀敏博/山田五郎
デザイン 池田隆男/AMNET DF
写真 五来幸平

えくてびあん 7月号

第18巻 通巻192号
平成12年7月1日発行
発行 えくてびあん編集部
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL. 042-528-0082 FAX. 042-528-0065
編集人 芳賀敏博
発行人 立井啓介
印刷 (株)大廣社

新聞転載を禁じます。

Topics トピックス

太郎冠者にて候

よろすきょうげん
「萬狂言の世界」
シネマシティで映画+実演+ワークショップ

ふだん映画を観ている舞台が狂言の空間に——映画を核にした文化イベントを定期的に企画している曙町のシネマシティで5月14日、能と並ぶ日本の古典芸能・狂言の催しが開かれた。

今回取り上げたのは、とかく敷居が高い狂言の伝統を、現代に生きた様式として伝承しようとしている和泉流狂言・野村萬蔵家の「萬狂言」の世界。人間国宝・野村萬さん(七世野村萬蔵より改名)の長男・野村万之丞さんのドキュメンタリー映画「萬蔵家」の上映、次男で「萬狂言」の中心的存在・野村与十郎さんらによる狂言「清水」の実演とワークショップという盛りだくさんの内容で、立ち見も出る盛況となった。

主人に水汲みを命じられた太郎冠者が清水に鬼が出たと嘘をつき、確かめに行った主人を鬼の面をつけて脅かすが、嘘がわかって…というおなじみ太郎冠者が主役の「清水」



希望者が舞台上で狂言の所作を体験



ワークショップ後のパーティーでは野村与十郎さんと話をした

に笑い、ワークショップでは与十郎さんの指導で簡単な台詞を全員で発声し希望者が舞台上で基本的な所作を練習。言葉と身振りが作り出す人間喜劇の楽しさと奥深さを体感した。襲名披露の秘曲「釣狐」公演(6月3日国立能楽堂)を控えた野村与十郎さんも「映画のスクリーンの前で演じたのは初めてですが、今日のみなさんの反応は最高。大舞台だけでなく、このような機会がもっとあるといいですね」と、立川での手応えがうれしそうだった。

プロさんの独断毒語

12

現在地

田植えもすっかり終わり、夏の風に吹かれてあ、日本の風景だなあと特に旅に出た時など実感する昨今です。
マンションの影がまてみる植田かな 順
立川市民俳句会の例会で出句され、好評をえた田中 順さんの一句です。現代日本の情景を見事にとらえた一行詩といえましょう。
ところで、話は全くちがうのですが、文章を書く、特に散文を書く時の心境というものは、あの「田植え」と似たところがあります。田圃に丁寧に植田をするように、原稿用紙の罫目に一字一字を植えてゆくように書き進んでまいります。一文が完成されて、最後のマルをつけるときなどは、一反の田植えが終了した時の快感と申しますか、完成感に似ているように思えます。

か不安でもあります。
ところが、あの四〇〇字の原稿用紙に書き付けていると、たとえば、五枚めに差し掛かると自分は今、四分の一あたりを書いているなあということが一目瞭然といたします。
もし、原稿用紙というものがなければ、私はきっと「迷子」になったような気分になるでしょう。私はもともと方向音痴で、慣れた街でも時どき迷子になる。
つまり、原稿用紙は私にとっては「地図」の

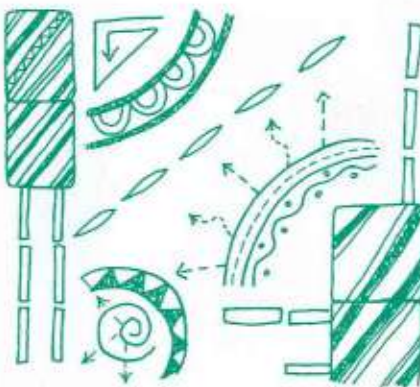


イラスト 綾 幸子

ようなもので、今、自分はこの辺を歩いているのか、どっちの方向に向かっているのかの「道標」(みちしるべ)のようなものです。
日本の地図を掲げたのはひとしる伊能忠敬でしたが、人生五〇年と云われていた時代に五〇歳にして、測量術を学び、五十五歳から七十一歳まで、十七年間もかけて三万五千キロも歩き続け、日本ではじめて正確な地図を作りあげたと聞き及んでおります。
こういう先達がおられたから、私たちは迷子にならずに済んでいるのでしょ。しかし、地図にもその「見方」というものがあって、一番肝心なのは「現在地」の確認です。登山をする時などは、地図が必携ですが、尾根を歩いているときは容易に現在地がわかります。が、原生林に迷い込んだときなどは、途方にくれてしまいます。白紙に文字を書き込んで、今、自分がどのあたりを書いているのか解らない状態みたいなものです。
「年令」も一種の「現在地」の道標かもしれませんが、こちらは「終点」がどこかはずかりません。そこが人生の妙かも知れませんが。(やまだ)らう・詩人

真味百撰

39



ステーキ&欧風料理 クワトロ

柴崎町2-3-3 / 528-2983
11:30~15:30、17:00~23:00 / 月曜定休

落ち着いた雰囲気
ゆったりと味わう
絶妙のチーズ・フォンデュ



一番人気のチーズ・フォンデュは、生ハム・サラダなどの付いたランチ・セット(1,500円)でも食べられる



91年にオープン以来、ステーキとチーズ・フォンデュを中心とした欧風料理で、立川にこの店ありという存在感を持っている。「クワトロ」の名を知らしめているのは、なんといってもオーナー・シェフ岩田一憲さんの約30年の思いがこめられたチーズ・フォンデュ。1970年大阪万博スイス・パビリオンの運営に関わって出会い、何よりも「自分が一番おいしいと思う味」を求めてチーズの配合などを工夫してきた。特注の陶鍋でパンに絡めて食べるクリーミーで芳醇、それでいてくせのない味が広がる。白壁と木の落ち着いた内装、間隔の広いテーブル配置に、ゆったりと食事を楽しんでもらいたいというポリシーがうかがえる。絶妙のフォンデュとワインで過ごすひときは、まさに贅沢な時間だ。イタリア語で「4」の意味の店名。基本的に岩田さん、奥さまら4人で切り盛りしている。厨房から接客までこなす岩田さんの気取らず折り目正しいサービスも人気の秘密かもしれない。欧風シーフード・カレー(1,200円)、ハンバーグ(1,300円)などのランチ・セット、夜は国産牛の炭火焼きステーキ(3,000円から)やコース料理も。ワイン約70種類、カクテル約80種類。

涼恋し

梅雨があけると曇りも本番。冷房が普及しても、夕涼みなどの知恵と情緒も大切にしたいですね。
スカイパーフェクTV216ch、マイテレビ84chで放送中の番組「常楽我浄(じょうらくがじょう)」では、ヒューマンドキュメント「イキイキ地球人」など真如苑の活動を多角的にご紹介しています。



放送時間

土曜 午前9時~9時15分
午後7時15分~7時30分
再放送 火曜午前9時~9時15分
午後7時45分~8時
放送時間は予告なく変更する場合がございます。

立川に育てられて六十四年



電話 042-13 TEL. 527-0111(FU)

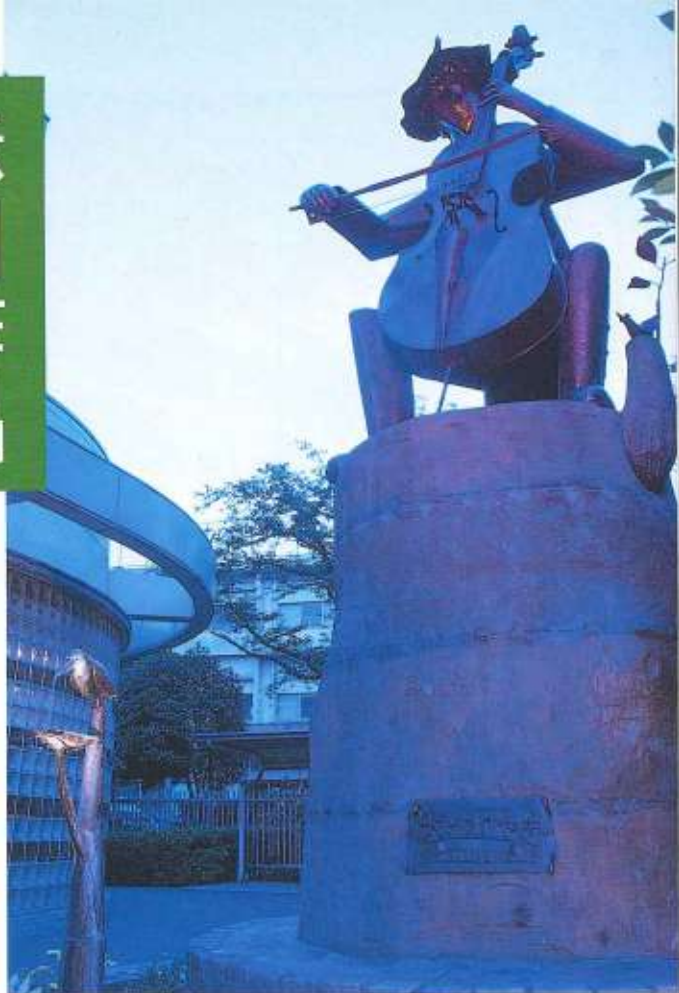
Support Your Dream
あなたの夢に賛助
あさひ銀行

デジタルえほん
メモリーブックにどうぞ...
ミッキーやキティちゃんと一緒に!!!
あなたの写真と名前が絵本の中に入ります。
PLANNING・DESIGN・PROCESS・PRINTING
大度社 042-527-1911
〒190-0022 東京都立川市曙町5-17-13
FAX. 527-1949
E-mail: JDC0215@nifty.jp

赤川作品 十二撰 最終回

「大きなけやき」

立川市幸町・幸公民館



絵画を志向していた自分が銅という素材に出会い、初めて拵えた彫刻は小さな「セロ弾き」の像でした。技巧的には全く拙いものでしたが、その作品には当時の僕のすべてが詰まっていたように思います。

平成元年、立川市から公民館に設置する作品の依頼がありました。若い頃から流浪の身だった自分にとって、それまで立川は「通りすがりの街」に過ぎなかったのですが、街の魅力を知るところに、ここを第二の故郷にしようと思いはじめていました。そんな時期に舞い込んだ依頼です。僕は迷わず、あの「セロ弾き」を造ろうと思いいちました。あの作品に僕の「彫刻家としての原点」があるとすれば、「立川人としての原点」とも云える作品の主題に同じモチーフを選ぶことは、僕にとってまさに必然でした。

想いが尽きないこの作品を、連載の最終回に紹介することができて幸いです。

(1990年制作・赤川政由)